

	<h1 style="color: blue;">お稲荷さんの話</h1> <h2 style="color: blue;">SCE・Net 神田 稔久</h2>	<p>E-89</p> <p>発行日 2016.9.8</p>
---	---	-------------------------------------

お稲荷さんと言っても、食べ物ではなく、稲荷神社の話です。

街中では赤い鳥居の立ち並ぶ稲荷神社を所どころで目にしますが、古くからある会社や事業場に稲荷神社が建てられているのを見ることがあります。稲荷にまつわる商売繁盛や安全を願って建立されているようです。

神道と稲荷信仰

稲荷信仰は、稲が成る稲成が起源と言われているようですが、京都の伏見稲荷大社を総本社とし、稲荷神社は三千近く、分祀社は三万を越えると言われています。

稲荷神社は全国に点在し、その中でも東日本に多く置かれているようで、その中で、江戸で盛んになったのは、三井越後屋呉服店（三越の起源）の願掛けが商売繁盛を招いたからだと言われています。

きつねと油揚げ

稲荷神社は、もともとが農業神で、狐が穀物を食い荒らす鼠を捕食することと、狐の色や尻尾の形が実った稲穂に似ていることから、狐が稲荷神社の遣いに位置づけられたようです。その稲荷神社には、お神酒などの他に、油揚げを用いた寿司や油揚げが供えられるようになり、ここから、油揚げを使った料理を「稲荷」と呼ぶようになったという説があります。また、狐の好物が鼠の油揚げであり、ここから転じて豆腐の油揚げを稲荷と呼ぶようになったとか、あるいは、稲荷は稲成で、お米の出来を司る神様であることから、米を入れる俵を模した俵型の寿司を稲荷寿司とよぶようになったという説もあります。なお、狐は肉食ですから油揚げは食べません。

商売繁盛から安全へ

稲荷神社は、稲の神であったものが農業神となり、中世以降になり商工業が盛んになって来ると、商業神・工業神・屋敷神など万能の神と見做されるようになっていったようです。そのような広がりを支えたものとして、神社の勧請が容易だったことがあるようです。申請方式で容易に勧請できたため、今風に言えばインターネット申請とでも言うのでしょうか、農村だけでなく武家や・町家にも、

さらには江戸時代になると芝居の神として芝居小屋にも勧請されるようになっていったようです。

そのような中で、三井越後屋呉服店の商売繁盛を願っての勧請が、お店の大繁栄を齎したため、さらなる稲荷神社の勧請に火をつけたことは十分想像できることと思います。

明治になって、神仏混交から廃仏毀釈となっても一豊川稲荷は仏教系一稲荷信仰は衰えることはなく、むしろ新しく起こった企業において盛んに勧請が行なわれ、今に至っています。そして、願う対象も商売繁盛だけでは、広く安全などもその中に含まれていったものと考えられます。

因みに、外資系の会社でも勧請こそはしませんが、稲荷神社にお参りをするようなことが行われているようです。

私と稲荷神社

私が勤めていた会社も、百年以上の歴史がある会社の例外では無く、本社を始め大きな事業所や工場には、必ずと言ってよいほど稲荷神社が建てられていました。

そこでは、少なくとも年に一回は神主さん、時には巫女さんも来て、祝詞をあげ神楽を舞うことが年中行事となっていました。

また、会社の中の稲荷神社でも歴史のある稲荷神社では、地域のお稲荷さんとなっていて、かつては、祭礼の日には、地域の人が事業所の中に入ってお参りすると言う、のどかな事も行われていました。

私は言うと、稲荷神社の祭礼の時は、祝詞は耳の右から左へ、巫女さんの舞に見とれ、直会のお酒を頂きながら、「今晚はどこで本格的直会をしようか」等と考える、不真面目極まりないことばかりでした。

そのような風土の会社の中で、四半世紀ぶりに新工場を造ることとなり、私はその立ち上げを統括する立場になりました。ゼロからのスタートですから、様々ことを造り上げて行かなくてはなりません、その本業の合間に、稲荷神社をどうするのが話題になりました。私は、生来の偏屈が頭を持たげ、稲荷神社を置かないことを提案しましたが、これが波紋を呼び、合理主義の塊と思っていた技術屋の先輩からの「これは理論や理屈の問題ではなく、心の問題だ。」との説得もあり、結局は稲荷神社を建立することになりました。

古き伝統に異を唱えてみたものの、終わって見れば、何も変わらない形となってしまいました。

さて、その稲荷神社の効用ですが、スタートアップは大きなトラブルもなく終わり、その後も二十年近く、順調に操業を続けていますので、大いに効果があっ

たとえるべきでしょうか。